

学 位 論 文 題 名

## 妊婦の不安とソーシャルサポートに関する研究

－初妊婦の不安と夫、家族および助産師からのサポートに焦点を当てて－

### 学位論文内容の要旨

筆者は妊婦の情動の特徴の一つは不安であると考えている。そこで第一に現代社会における妊婦の不安を明らかにするための多次元尺度と、その不安を軽減するために多次元のソーシャルサポート尺度を開発することを目的とした。妊婦の不安に関する先行研究を吟味し、妊婦の中でも不安の高い初妊婦を対象として、新たに下位概念として8要因を選び、8要因の下に計46項目を設定し、妊婦特有の不安を測定する尺度（初妊婦用不安尺度）を開発し、その信頼性・妥当性を検討し、妊婦の不安の構造を多面的に明確に捉えることを可能にした。最終的に、項目分析、主成分分析によって8因子を抽出し、23項目からなる初妊婦用不安尺度を開発し、信頼性・妥当性を確認した。この8因子に、「経済的側面に関する不安」、「異常妊娠に関する不安」、「母親役割への不安」、「夫に対する不安」、「生活（時間）変化への不安」、「情報支援に関する不安」、「身体的変化に対する不安」、「家事に関する不安」因子と命名した。これらの8因子の特徴は経済的側面、心理的側面、支援者に関する不安であり、妊婦の不安要因は、従来信じられてきたように身体的側面への不安（分娩の経過への不安、児の異常への不安）に限定されるものではなく、心理的、社会的側面に対する不安も強く、現代の妊婦の不安の特徴が示されたと考える。

第二として、妊婦は、母親になるということによって新たな役割を認識し、アイデンティティを再形成していくという重大な課題が妊娠によって始まる。このような状況において、もっとも安寧な妊娠・出産をサポートすることが重要である。そのためには、初妊婦がどのようなソーシャルサポートを受けていると認知しているのかを知ることは、今後彼ら（未来の彼ら）に、どのようなサポートが必要かを明らかにする上で重要である。筆者は4つの視点を持ったHouse(1981)の下位概念（情緒的サポート、道具的サポート、情動的サポート、評価的サポート）が心理的、身体的、社会的変化の激しい妊婦にとって必要な概念であるとの考えから、彼の概念を参考とした。この4つに社会的資源という筆者の考えを加えた5つの下位概念に36項目を選定し、不安尺度の開発と同様の手順で、多次元の「初妊婦用ソーシャルサポート尺度」を開発した。その結果、情報提供、承認、直接的援助、社会的資源、共感の5因子を抽出した。これらの5因子は、Houseが提示した4つの概念と筆者が選定した概念（社会的資源；家族以外の人との交流等）とほぼ一致した。本尺度は信頼性・妥当性が認められた。

第三として、初妊婦が種々の不安を感じても、それをサポートする機能があれば不安は軽減すると考え、サポート得点が高い妊婦は不安得点が高いとの仮説に基づいて、仮説を検証するため、新たに開発し信頼性・妥当性が認められた上記二つの尺度を用

いて検証した。さらに、どのような不安がどのようなサポート内容（因子・項目）によって軽減され、支援されるのかを明らかにすることを目的とした。その結果、ソーシャルサポート得点と不安得点との関連において、第5因子（共感のサポート）を除き、他のサポート4因子（情報提供、承認、直接的援助、社会的資源）の得点と不安得点との間に負の相関が認められた。また、経済的側面での不安因子得点を除いて他の全ての不安因子得点はソーシャルサポート得点と負の相関を示した。このことから、サポートは初妊婦の不安と密接に関連し、不安を緩解している可能性が明らかになったと考える。

サポート提供者について、夫、実母、姉妹、友人・知人、助産師、父親、舅・姑、その他に分けて、初妊婦が受けていると感じているサポート者の違いを明らかにした。共感、承認のサポートは夫からが高く、次が実母であった。情動的サポートは友人・知人からが多く、次が実母であった。社会的資源の情報は友人・知人からが多かった。直接的サポートは夫からが多く、次いで実母であった。このように、共感、承認、直接的サポートにおいて夫が一番高く、次いで母の順であり、夫と実母は最も重要なサポート提供者であることが明らかになった。これは喜多の結果とほぼ類似していた。また、助産師は情報提供のサポートにおいて実母、友人・知人に次いで、3番目に認知されていた。助産師の存在が情動的サポート者として認められていたことは、その役割の重要性を示唆するものであり、初妊婦は多方面からのサポートを必要としていること示唆するものである。

第四として、女性の生きる選択肢が多岐にわたっている現代においては、女性が自分の考えを持って生きることが大切である。自己に対して「これでよい」と感じる自尊感情が高いほど、すなわち自分に対する自信を持って生きることが、この複雑な社会に適応していくための一つの要因であり、不安を解消していくことになると考えられる。妊娠をして初めて母親になるということは、特に心理的には母親としての役割を担う自己、妻から母親になるという自己概念の再形成など、そこには不安、悩み、葛藤を伴うものであると考える。Rosenberg (1965)は、自己に対して「非常によい」と感じることと「これでよい」と感じる面のうち、「これでよい」と感じる程度が高いほど自尊感情が高いと考えて自尊感情尺度を作成した。その自己を肯定的にそのまま受け入れることを自己受容という。妊娠期は非妊娠時とは異なる身体的、心理的、社会的適応が必要とされる。自尊感情得点と不安得点との間に負の相関が認められた。自尊感情得点が高いほど不安得点が低い結果であった。自尊感情得点と8つの不安因子との相関をみると、不安第3因子（母親役割への不安）間の負の相関係数が最も大きかった。「母親役割への不安」の内容は、母親になる自分自身を改めて問う内容であり自己成長に関する因子とも考えられるが、この因子と自尊感情の間に負の相関があり、妊娠期の母親にとって自尊感情が高いことが不安を軽減させることになると考えられる。関連が認められなかった不安因子は「異常妊娠に対する不安（第2因子）」、「身体的変化に対する不安（第7因子）」であった。第2と第7因子は身体的不安に関する因子であり、認知的不安因子は自尊感情と有意な負の相関を示したことになる。特に、育児や母親役割への不安因子と相関が認められたことから、育児を含めた自己の不安を、妊婦自身がどのように価値つけていくかが問われていると考える。自尊感情の下位概念として自己効力感が知られている。自尊感情は長い時間をかけて形成されてきたものであり、変化しにくいのに対し、自己効力感は一時的に操作可能であることが知られる。本研究では、自己効力感得点を評価していないが、自尊感情とほぼ平行することが明らかになっているので、自己効力感得点を高めることで不安得点が低下す

る可能性も示唆された。

今後の課題として、初妊婦用不安尺度、初妊婦用ソーシャルサポート尺度をさらに信頼性・妥当性の高いものとし、初妊婦に限らず全ての妊婦を対象に不安やサポートをスクリーニングすると同時に、より良いサポート体制を考案し実用化できるように検討を重ねていきたい。

## 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 森 谷 繁  
副 査 教 授 河 口 明 人  
副 査 教 授 水 上 尚 典 (北海道大学大学院医学研究科)  
副 査 教 授 諸 富 隆 (作新学院大学人間文化学部)  
副 査 教 授 橋 本 公 雄 (九州大学健康科学センター)

### 学 位 論 文 題 名

## 妊婦の不安とソーシャルサポートに関する研究

－初妊婦の不安と夫、家族および助産師からのサポートに焦点を当てて－

本研究の評価すべき第一の点は、現代社会における初妊婦の不安の内容と構造を明らかにするための多次元尺度並びにその不安を軽減するために多次元のソーシャルサポート尺度を開発したことである。初妊婦の不安についての先行研究を吟味した上で、あらたに下位概念として8要因を図式化し、8要因の下に計46項目を選定し、項目分析、主成分分析を経て、8因子・23項目からなる初妊婦用不安尺度を開発し、その信頼性・妥当性を確認した。8因子を「経済的側面に関する不安」、「異常妊娠に関する不安」、「母親役割への不安」、「夫に対する不安」、「生活（時間）変化への不安」、「情報支援に関する不安」、「身体的変化に対する不安」、「家事に関する不安」因子と命名した。これらの不安因子の特徴は初妊婦の身体的・心理的・社会的側面の不安を含み、核家族化が進行する中で孤立しがちな現代の初妊婦の不安の特徴を把握するものであった。具体的には、先行研究では明確になっていない不安因子、すなわち経済的側面の不安、身体的変化に対する不安、母親役割への不安であった。次で、初妊婦においては、母親になるということによって新たな役割を認識し、母親としてのアイデンティティを形成していくという課題が妊娠成立とともに始まるが、このような妊娠期を安寧に過ごせるようにサポートすることは重要である。そのために初妊婦がどのようなソーシャルサポートを受けていると認知しているのかを知ることは、どのような支援が必要かを明らかにする上で重要である。筆者はHouse(1981)のソーシャルサポートの4つの下位概念を参考とし、これに社会的資源という筆者の考えを加えた5要因の下位概念に36項目を選定し、不安尺度の開発と同様の手順で、多次元の「初妊婦用ソーシャルサポート尺度」を開発した。本尺度は「情報提供（お産に良い病院を教えてください人がある等6項目）」、「社会的資源（家族以外の人と一緒に食事をしてくれる

人がいる等3項目)」、「直接的援助(妊娠してから普段以上に家事をやってくれる等3項目)」、「承認(妊娠中で摂生している自分を評価してくれる等3項目)」、「共感(元気がないとすぐ気づいて気遣ってくれる等2項目)」の5因子と17項目からなり、信頼性・妥当性が確認された。

第二に評価すべき点として、初妊婦の不安とソーシャルサポートの関連を、サポート得点の高い初妊婦は不安得点が低いとの仮説に基づいて、新たに開発した二つの尺度を用いて検討したことである。ソーシャルサポート総得点は不安総得点と有意な負の相関を示し、筆者の仮説は裏付けられ、「共感」のサポート因子得点を除き、他の4サポート因子得点と不安得点との間にそれぞれ負の相関を認めた。「経済的側面での不安因子」得点を除いて他の全ての不安因子得点はソーシャルサポート得点と負の相関を示したことから、サポートは初妊婦の不安と密接に関連し、不安を緩解している可能性を明らかにした。さらに、サポート提供者をサポートの内容(因子・項目)について明らかにしたことである。「共感」「承認」のサポートは夫からが高く、次が実母からであった。「情報提供」は友人・知人からが多く、次が実母、3位が助産師であった。「社会的資源」の情報は友人・知人からが多く、「直接的援助」は夫からが1位、次いで実母であった。このように、共感、承認、直接的援助において夫が最も高く、次いで実母の順であり、夫と実母は最も重要なサポート提供者であることが明らかになった。また、助産師は「情報提供」のサポートにおいて実母、友人・知人について、3位に認知されていた。助産師の存在が情報提供サポート者、特に「妊娠中に起こりやすい異常と予防法について助言をしてくれる」のような専門的情報の提供者として認められていたことは、その役割の重要性をあらためて示唆する結果であった。

第三に評価すべき点として、自己に対して「これでよい」「自分にもできる」と感じる自尊感情・自己効力感を初妊婦の不安と関連づけて分析したことである。妊娠期は非妊娠時とは異なる身体的、心理的、社会的適応が必要とされる。自尊感情得点と認知的不安因子得点の間に負の相関を認め、自尊感情の高い初妊婦ほど認知的不安が低いことを明らかにし、自尊感情・自己効力感の重要性を示唆した点が評価される。自己効力感は教育によって高められると考えられている。

このように少子高齢化の進行する現代社会の初妊婦を対象にして、その不安の構造を多面的に把握すると同時にサポートや教育という観点で多くの人たちが関われる状況を、ソーシャルサポート並びに自尊感情という不安を軽減する尺度で明らかにした点は高く評価される。

よって筆者は、北海道大学博士(教育学)の学位を授与される資格があるものと認める。